

可認物便郵種三弟省信遞日六十二月二十年一十三治明
行發日五十日一圓二月每行發日一月九年五十三治明



日本原流

政教時報

號 六 十 八 第

論 說

阿片的佛教

加藤博士の『佛教改革談』を讀む

社

説

真岡湛海

社會

社

説

真岡湛海

◎大谷派の紛擾 ◎宗教法案に關する風説 ◎

工女虐待と仁慈的婦人 ◎佛教儀典と音樂

◎救世軍の分裂 ◎佛國の宗教問題等

『海外時事』

雜錄

監獄未來の夢物語

筑涯閑人

講究

劍虹

加特力教師の妻帶禁止

池山榮吉

近角常觀

信界

佛弟子小傳

▲社會小觀 ▽

西人の東洋的事物に對して惡辣なる批評を爲す者、時々阿片的佛教なる造語を用ゐることあり、是固より佛教の真義を知らざるものゝ言にして、決して佛教其物の眞價を上下するに足らずと雖、確かに東洋的弊害を指摘して痛罵骨に徹する者、吾人信仰の生命、人生活動の根本たる宗教に冠するに生命の鴉毒、人心の麻痺たる阿片的なる形容詞を以て、侮辱是より甚しきは無し、聽く者以て誠と爲すに足る須らく冷靜なる頭腦を以て此黙黙が如何なる教訓を吾人に與ふるかを考察せよ。

古來理想的考察は東洋の長所とする所にして、靜座冥想、心を天外に馳せ、精神偏く六合に瀰漫して宇宙と洪荒を同ふするが如き、妙味に至りては蓋し西人の及ぶ能はざる所ならむ、然れども人間長所の存する所は、即ち短所の伏在する所、東洋人が理想的長ぜしだけ、却て現實的に頗る不足するを見る、宗教の如き、道徳の如き、常に其説く所高尙圓満なるにも拘はらず、其實際的の施設に至りては全然其趣を異にし、人にして其説く所全く空言戲論にあらざるやを惑はしむ

阿片的佛教

政 教 時 報

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一一致を鞏固にし、國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を作らしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極の方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を廃絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講する事。

大日本佛教徒同盟會綱領

或は深谷に墮落する事もあるべし、其甚しきに至りては徒らに私慾の爲めに馳驅せられ、虚榮の爲めに鞭撻せられ紛々擾々益々出で益々醜を極むるに至るべし、古來宗教の實際問題に於て屢々腐敗を極め、墮落の極端に達する所以のものは畢竟宗教の理想を忘れ、信仰の生命蟬脱し來りて、徒らに蟲々蠕動を事とする他の動物性活動と何の撰ふ所なきに至りし結果也。

吾人傍々現時佛教界に於ける思潮を察するに極端なる二種の相反對せる傾向を生ぜり、其一は放縱散漫なる凡俗的風潮にして其一は空想退要を事とする遁世的風潮是なり、前者は世上の嗜好に投し、凡俗の風儀に同化するを主とする者にして其弊の極るや俗界に墮落して腐敗汚穢俗の最も俗たるものにして、宗教の本領を失墜するのみならず、却て宗教の名の下に敗徳汚行を極め、權力爭奪を事とし、空名虛位を貪り、自家の利益を以て最後の目的とするに至る、後者は然らず、慥かに前者の如き宗教の墮落其極に達したるの時世にありては、一種の激樂として其功なきにあらずと雖、他の紛々たるを厭ひ他の擾々たるを憂ひ、以て自ら清ふするを以て能事とし目的とするものなり、他が凡俗的經營に汲々たるに反して、自ら理想的空論を喜び、他が争鬭を事とするに反して沈黙を以て唯一の德義と考へ、自ら高尚なりと爲し、脱俗なりと假定して一時の表面的沈靜を假裝する者也、前者は凡俗卑

しからむとし、此の如きは稱して積極的と云ふも單に理論的に積極なるのみにして事實的に積極たるを得ざるなり、教理はたしかに大乘的極致に達せりと雖實際上に於ける彼の灰身滅智を目的とせる小乘の徒と何の撰ふ所かある、此に至りて阿片的佛教の語たしかに其病根に適中するの快刀たるを感じる者也、既に理想なるもの其活力を失し、靈性を喪ふ此の如し、宜なる哉實際界に向て何等の感化をも與へずして腐敗墮落を極めしむる今日の如く甚だしきに至るや。

已上の言を以て單に現時の宗教界のみに適用すべきの論議となす勿れ、我國すべての社會は何れも皆阿片的也、麻痺的也、燒毒的也、政治社會にみよ、實業界にみよ、何等の理想もなく何等の信仰もなく、唯徒らに虛榮と空名を追ふて、事を好み喧嘩を事とするのみ、而して社會の風教を司り、國家の教育に關係する學者若くは教育家なるものは各個人内に似たり、其施設する所唯徒らに邊幅を修飾し、形式を美麗其到着點を顧みるなく、恰も扁舟の飄々として海上に漂へる

にして以て自ら得たりとする輩のみ、此の如くして果して將來吾人國民の運命を如何にせんとするか、吾人は多言せず、現時朝野政治家の行動、内外實業家の畫策、果して何の處に健全なる施設と堅牢なる地盤の上に立つものがある、吾人は阿片的政治、阿片的實業、阿片的教育の幣滔々として極る所を知らざらむとす。

翻て印度にみよ、暹羅、緬甸にみよ支那にみよ朝鮮にみよ、何か故に此の如く、無氣力に、何か故に此の如く懦弱に、何か故に此の如く活氣なく昏々として眠り終らむとするか、印度今日と雖、ベタを暗んじ、幽幻なる哲學に通暢する學者多く、暹羅、緬甸、戒律を墨守して塵外に超然たる僧侶はあり、支那亦草澤の英雄粗笨なる頭腦を以て憂國の涙を灑くもの多々あるべく、朝鮮亦麥秀を謠ふて隱君子をさめこむものあらむ、而して其他の半面をみよ、幾多の生靈は或は塗炭の苦に陥り、無氣力懦弱の遊民となり、貪戾飽くなき猾商となり、不規則なる行政となり、亂暴なる政府となり、個人に權利の思想なく、社會に道徳の制裁なし、阿片的社會の將來夫れ此の如し、我國頻りに形式的文物を輸入して、沐猴の冠を學ぶと雖、人心の根底より大改善を施し、積極的に靈活なる佛教の精神を興起せしむるにあらずむば我國將來の運命岌々乎として夫れ危き哉。

昔者サボナローラは伊國貴族か淫樂沈醉する間に起ち、毅

然として直言讃々神權政治を唱へて遂に殉教の炎に斃れ、クロムウエルは猛然孤劍を揮ふて英國奢侈の氣風を一洗し、聖人高僧を見よ、傳教弘法の兩大師は南都上下淫樂の社會を質撲一に信仰の火を以て社會を改造せり、翻て我國古來の聖人高僧を見よ、傳教弘法の兩大師は南都上下淫樂の社會を破壊して森嚴清肅なる山佛法を開き、法然、親鸞の兩聖人は王朝の華侈平門の傲奢に次ぎて源平二家の阿修羅的血闘と榮枯盛衰とを屢々目撃し、叡山高野の形式的佛教毫も社會を救濟し得ざるのみならず、却て社會をして腐敗枯死せしむる阿片的佛教たるを看破し、斷然山を下りて京洛市民の間に投じ平民的宗教を開闢し、社會的宗風を實行し、讀者の訴となり、遠謫の刑に遭ひ、北越の濱、常陸の野、流離閑關、群靈を化し、衆生を救ひ賜へり、洵に是吾人永劫の生命、人生活動の根源也。今や我國政界教界正さに腐敗墮落の極に達せり、聖人の高風を追憶して感止む能はざるものあり、實に我國民たるもの佛教の真精神に立戻るべき時にあらずや、一たび其信仰を生かし來り、各人自ら懺悔して佛陀の救濟を仰ぎ、社會の罪惡を根除せよ、我國教界政界を清め、社會を改造し、東洋諸國の阿片的中毒を覺醒する決して難事にあらざる也。

日曜講話

本月より毎日曜午前九時

番地二百四十號に開く。

今日の宗教家が品行方正、道徳堅固であつて、多少社會に益を與ふるならば、宗教も不必要とはいはない、一部の人には有用といふてもよからうといふ議論である、故外山博士の口調を借りていはゞ「イフ」で抑へた議論である、そこで今日の宗教は凡て腐敗して居るから、つまり無用だといふことになる、悪ければ悪しといひ善ければ善いといはれるのは當然の議論で別に異議を挿むべきものでない、しかしながら本來私は博士と立脚地を異にするものであつて、博士の議論はいつも此方に利益を與へてくれたら、それは有用とも善いともいひ、自己の利益を與へてくれぬときはそれは無用である悪いものである、物をくれたら返禮もしょうが、くれないものには、やる必用もないといふ様な功利主義から割り出した交換的議論が先入主となつて動かすことが出來ないのであるから、博士には逆も慈悲とか救濟とか報恩とかの宗教的意義が充分に理解出来なかろうと考へる、譬へば博士が水は冷かなものであるといふ様な議論で、結局、冷暖、其度を異にして居るのであるから、頭から其議論が違つて居るのである、我々は宗教は人生になればならぬものと信じて居るので智者でも學者でも科學者でも美術家でも、商人でも農家でも必ず宗教を要するものと思ふ、極端にいはゞ絶對的に宗教有用論者である、悪いものと善いものと、道徳の堅い人と、

加藤博士の佛教改革談

と讀む

眞岡満海

社會學研究會で加藤博士が、佛教の革新既に緒に就く」と題して話されたとは、聞き及んで居りましたが、近頃博士は佛教改革談と題し、金港堂から出版せられましたので、どんなどが書てあるか、定めて有益なる御話してあろうと思ふて、私も一冊を買ひ求めましたが、読み終て聊か失望いたしました、加藤博士の學術界に於けるは恰も板垣伯の政事界に於ける様なもので、今さら嶄新なる議論を御老人から承らうとは思はないが、今や一方には大谷派本願寺の紛擾あり、他方には本派の東陽圓月氏なども老齢を以て小川丈平翁の安心に就て駁撃して居るといふ有様であるから、時節柄、博士の改革談は多少人目を惹くべきものとして此に其意見を紹介いたします、私の所感をも述べようと思ふ。

博士は先づ自己の宗教嫌ひであるといふとから説き起して、自己の宗教嫌ひであるといふとは絶對的ではないと説き、つまり博士の如き智者學者には宗教の必要はないが所謂愚夫愚婦には必要であるから絶對的に不必要を唱へるのでは、ないといふ意見らしい、即絶對的に宗教無用論者ではなく、條件的宗教有用論者である、其條件とは何であるかといはゞ、品行の修まらない人と、清らかなるものと潤つて居るものとあるのは、官吏にも教育家にも政事家にも商人にも、軍人にも宗教家にも、社會執事の方面にもある、然るに宗教家が一番先に腐敗して社會を腐敗させた様にいはれるのは、聊か閉口する、悪いことは宗教家に罪を歸し、善い事は皆自分の力であるといふ様な我利主義が本來氣に喰はない、今日の所謂學者先生は、合理主義だとか理性主義だとか知識の進歩とか、科學の進歩とか大袈裟にいつて宗教は知識の進歩を妨害するものであるといふ點から時として攻撃をせられるが、全體社會の進化といふとに付ては、人間の頭が大きくなつたからとて、手や足や、胴が發達せない時は何もならないので、知識ばかり進歩しても、此大なる一の有機體中の諸機關が整備せなければ到底駄目である何千年間此人類社會の中に流れ居る血液にも譬ふべき様な宗教たる大要素を、度外視して此社會現象を解釋しやうとするのは根本的に誤つて居る、加藤博士が兎に角條件的にでも宗教の有用を説かるゝのは、平生の議論に比すれば聊か進んだ様であるが、私は尙一步を進めて博士が宗教は是非共無けねばならぬと感ぜらるゝ様になつて頂きたいのである、

博士の宗教に關する意見の下に、凡そ宗教といふものは學問とは違つて知識が主になるものではない、全く情といふものが主になるのであるから、衆生濟度に熱誠なる一偉人が自

分の身命をも門地をも、家族をも財産をも抛ちて一心不乱に衆生濟度に盡さんとする覺悟でなければ到底開けるものではない」といつて「新佛教」の様に討論や評議と云ふとて出来やうと思ふのが第一の間違であると書てある、此點は大に宗教の性質が分つて居る様で、學理教義の革新よりは、衆生濟度の上に就て革新をなせといはるゝのも至極最もの様に思はれる、然るに博士が此の如く言はるゝ奥底にはつまり今日學問あり知識ある人には宗教は少しも入用でないから學理や教義はどうでもよいといふ妙な論法が附て廻るから、全體の議論は畢竟宗教を馬鹿にして居るのである、

博士は此の如く論じ尙歩を進めていはるゝには「宗教といふものは夫れを取り扱ふ人間が、第一に大切で、宗教其者は極めて大切といふ程のものでないと思ふ、今日の佛教僧侶は實に惡事を働く奴である、唯用に立たぬのみならばまだよいが社會に害毒を流すに至ては決して許すとが出來ぬ……僧侶の中でも真宗が最も甚しい、殊に其本山たる本願寺が最も極度に達して居る……、今日の佛教僧侶は全く賣僧と云はねばならぬ宗教を利用して金錢を貪り取るとを商賣として居るのである詐偽商賣をして居るのである、」

博士は極めて痛快なる筆鋒を以て、各宗共に腐敗して居るといひ、或は加持神福をして金錢を貪るとを嘲り、信州の善光

唱ふるのみと歎くするといふとて、加藤博士などの氣に入つたところは第一此點らしい、羅馬の舊教が腐敗したときには謝罪券を金で賣つたり、買つたりするといふ様なことがあつた様であるが、如何に真宗が腐敗しても、金を出さねば極樂往生は出來ぬといふ様なことはいふものはなかろう、唯既に一宗一派をなす以上は、寺院あり殿堂あり教會あり、團體あり、學校あり、慈善事業あり、海外布教あり、假令小川翁がいかにゑらい人であつても、サンフランシスコの教會堂に唯獨り念佛して、直に赤唇を感化するといふことが出来るものではないし、教會の組織經營、布教傳道の方法に於て多少の金を費さねばならぬといふことは分りきつたことである、信心は金銀手足に依て買はるべきものではなく賣るべきものでないことは勿論であるが、「金を出すな」といふことが、何だか金を惜む様なケチな金持根性の様にも聞えるではないか、大谷派本願寺が二百萬圓の借金で苦しんで居るといふが、我輩金があつたら二百萬圓献上したい、南條博士だけでも優に百萬圓や二百萬圓位の價値があるてはいか、全體今日の人は凡て宗教や人物を文久錢位で買へる様に思ふのが間違つて居る金をくれといふのも出すなどいふのも誤つて居る百萬圓出しても二百萬圓出しても到底買ふことの出來ない尊い神聖な信仰じやから喜ぶのである釋迦でも基督でも金が入るとか入らぬとかいふたことはないから、宗教改革者もそんなことは

寺や成田の不動や、川崎の大師をあげて之を攻撃し、遂に此の如く言つて居る。

「此の如き賣僧が表面には海外布教だの、外教防衛だのと騒ぎ立て居るが實に見苦しい話ではないか、此腐敗墮落を今日に於て矯正して革新を施すの術は到底見出し得られぬ疑問を置き、幸にも小川翁といふ人が出たから、大に臺ぶべきことなりとて、佛教改革の端緒是より開くものなりと稱讀しルーテルは神と人間との直接の關係を回復せんとするので實に仁人と彌陀と衆生との直接の關係を回復せんとするので實に仁人と稱すべきものなりと書てある、

小川氏は七里恒順師の門弟であるから定めて信心相續、其德行優に今日の僧侶以上の人である様に思へるから、其信仰の如何は暫く置き、其行に於ては恐く敬慕すべき人ならんと思ひますが、唯新聞の傳ふる所によれば、其主義とするところに於て、聊か狹きに過ぎる所はなきか、又箇人主義に傾き過ぎては居ないかと思はるゝ點があるから、其二三を記して私の之に反対する點を述べようと思ふ、

先第一に小川宗の骨目とするところは、「信心に金銀手足の要文なし」といふので、宗祖蓮師の聖經を拜讀しても報謝に金銀を出せず手足を述べよと教へられたるところなし、唯念佛を易い謬見てある、多人數が集つて居る中で自分獨り大きな聲で念佛を唱へる、或は自分獨り大きな聲で題目を唱へるとか、其信仰の確乎たるは喜ぶべきことであるが、先頃も漁車の内で西洋人の耳のそばで、極めて大なる聲で念佛して居る人があつて、西洋人は非常に不愉快な顔をして困つて居るを見た、私は此の如く凡て非社會的なることが甚だ嫌である或時宿屋に泊つたことがあるが、其隣りで或紳士が置酒高會徹夜の飲をなし大にさわいで居たために遂に眠ることが出来なかつた、自分の金で自分が酒を飲むといふとは別段深く咎めることでもないが、他人の眠りを妨げ、他人の不快なる感じを起さしむる様なことは少しく譴まねばならぬ様に思ふ之と同じ様に自己の信仰上から自ら慰め自ら喜ぶといふことは實に結構なことであるが、人をして不快の感じを抱かしむ

る様な行動は餘り人に勧めない方がよからう、寺院へも參詣すべからず、祖堂へも手足をはこぶべからず、多人數の中に出て、佛法を喜ぶべからず、慈善財團にも寄附すべからずといふ様な事が、若しも小川翁の眞の精神から出た言であるならば、私は其あまりに箇人的に過ぐると云ふ點から反対をする、釋迦の後に釋迦なく、親鸞の後に親鸞なしといふ通りに小川翁の精神は恐くそんな心でなかろうと考へるがその信者の内には多分幾多の誤解が出來て居るに違ない、ソクラテスの後に小ソクラテス學派といふものが出來て其倫理説が三に分れてしまつた様なもので、兎角自分の都合のよい様に人間は解釋し易いものであるから、宗教を説くものは殊に此點に注意して頂きたい、親と子の間が中よくあつたならば兄弟の間は喧嘩してもよいと云ふことはない、一家族の間が睦むかつたならば親類とは交際せんでもよいと云ふ様な考へではいけぬ、私は我國の宗教改革に付て、小川翁の信仰にも、又新佛教諸君の主義にも共に反対である、何となれば是等は共に箇人主義及合理主義の弊に陥っているからである、人類社會の進化といふとが今日では私の精神を支配して居て、此考から自然に此等の二傾向に同意を表すことが出來ないやうにつた、英國の一社會學者が、嘗てこう云ふとをいふて居た、我社會の組織は恰も有機體の様なもので一方には社會の基礎である倫理組織には、生理學の所謂營養作用に似た長生保養

ののみである、手も出すな、足も運ぶな金も出すなどといふ事になつてしまふ様である。

合理的主義の弊といふのはどうであるか、此人は茶碗屋にきていろ／＼の陶器を見て、九谷焼は色がはで過る、清水焼はあまり淡泊すぎる、瀬戸焼も悪い、有田焼も悪い、薩摩焼も悪い、萬古焼も悪い、相馬焼も悪いといつて彼等は陶器屋に来て、冷かし、批評し遂にいづれも氣に入らぬといつて地になげつけ打ち破つてしまつた、そんならどうか氣に入つたものを作つて頂きたいと頼んだら、我々は今、科學と哲學の力で研究して居るが多分二十一世紀になつたらば出来るだらう、つまりない奴が生きて居る間は、とても我々の思ふて居る様な理想のものは出来ないと、嗚呼如何に高尚なる將來の宗教ではありませぬか、是れ豈に分解作用が營養作用に過ぎて居るものではない大谷派の紛擾を見るにつけても一滴の涙禁するに堪えないのである私の考では小川宗の方が其宗教的なる點に於て新佛教より善いと思ふことは加藤博士と同様であるが、

自分の考では私の方が更に一步を進んだ高い點即社會的の考から之にも反対するのである。

宗教が社會に與ふる力の大なる點を考察しまするに、唯其箇人精神の上に確乎たる信念と安慰を與ふるばかりでなく、進んで己れを忘れて他を愛し、社會のために献身的犠牲的となり身命を顧みずして其改善進歩のために盡すといふ様な社會的性情を起さしめ其道徳的品性の上に大なる感化を與ふるのが宗教であると考へる、即一心一向に、義務に服し、責任を重んじ、困難に堪え、勇氣を鼓舞し、決心を強固ならしめ、自利的現在的の主張を離れて、將來の希望のために、深く社會的同情の念を以て活動せしむるのである。若し或社會學者の様に社會を一つの有機體に譬ふれば、宗教は、其各箇人の間を通じ、其各機關の間を流るゝ血液であつて、其最も勢力ある宗教は恰も大動脈の様なものである、此血液の運行が悪い時は決して喜ぶべきことではない此血液の運行が止まつた時は則國民の活動又從ふて止まつてしまふのである、知識の進歩のみを以て國家の隆盛を豫想するものは多少脳充血の氣味がある宗教の腐敗を憂ひないものは多少心臓病の氣味がある、金のない脚氣患者やら、神經衰弱やら、半身不隨やら、種々の病患に犯されんとする者が多い時であるから、吾等は世の仁人の助けを借りて、共に此改善を促したいのである

成育の務をなす發達力があり、又一方には箇人の自主的理性があつて所謂分解作用に似た解體的破壊的の傾向がある、有機體に於て分解作用が營養作用に過ぐるとときは衰弱に赴く様なもので社會に於てもその通りである、箇人主義と合理主義が極端に陥るときは、自分勝手な議論に理屈ばかり並べて、何事も一致するといふとなく、何事にも反対し、互に敬愛するの情がなくなつてしまつて、實に冷やかなる人間社會となり、理屈さへ合へば自殺しても善い、人を殺してもよい泥棒としてもよいと云ふ様などになつてくる、今死にかゝつて居る病人を見ても、此等の弊に陥つた合理的、箇人主義の論者は敢て藥を與へやうともせず、何故に此病氣が重くなつたかといふとを議論して居る、結局は自分の新發明の自由討究散とか清心丹とか、試みにやつて見たらばよからう、病氣が癒るうがなほるまいが、死んでも生きてもどうでもよいのである、人間は恰も生理解剖室の動物の如く、種々の新藥を試験されるのである、中には或は幾價無料の施藥院を立て、門前には甲の所の藥價は高い、乙の處は無暗に貪る丙の處は騒々しいが獨り我輩の處は閑靜にして無料施藥をなすと張札を出す人もある、貧叟などは直様此處に大賛成を表するのである、さて一度此施藥院に入るときは、遂には外出を禁ぜられてしまつて、散歩も出來ないやうになる、非社會的主義が徐々注入せられて、箇人主義となり、人の多く集まる處は皆是れ名聞利る

以上述べたところは、唯少しく意見を異にして居るところから圖らず、加藤博士に對しても禮を失した言を申上げて申譯ない。しかし我等は常に此の如く思ふて居る、今日の時代は十六世紀の時代と異つて居るから、宗教革新の前途に對しても多少、歐西に於ける現代の思潮の如何なるものなるかを味ひ、又彼の歐州の歴史が政治上、宗教上、其他凡ての上に於て文明史の上にのこしたる幾多事蹟の得失を考へ、徐ろに自己の所信を貫徹する様に勉めて貰ひたい、若し我々が現代に於て之を行ふとが出來なかつたならば則ち之を其子に傳へ、其孫に傳へ若くは其弟子に傳へて之を遂行せしむる様な持久的精神がなければいかぬ。

加藤博士の意見は一方から考へると實に我教界に與へた大なる刺激であつて、我邦の宗教家が之を讀んで慚愧の心を起し肅然として色を正しうし、銳意熱心。佛陀の德音を傳へ、眞面目に其事業に從事し事實に於て加藤博士の酷評を打ち消すことが出來たならば、此三十一頁の小冊子も或は宗教革新の端緒となるかも知れぬ、此點に於て、私は深く、小川翁並に加藤博士の苦言酷評に感謝するのである、實に我々も清新なる宗教の眞面目なる行動が各所に行はれんことを希望して止まぬものの一人であります

近角さんまことに御無沙汰致しました。まことにやいもので君もばや東京住、かく申私も九月七日の神奈川丸で歸ります、天長節頃にはもう御目にかゝつて柏林のむかし話をすることです。多分吉田君も同船の事さ思ひます柏林の日本料理は懸しい事はありませんか。

七月十三日
伯林にて
吉田 静致

社 會

大谷派の紛擾

大谷派宗政の紛糾、吾人之を筆にするに忍びざるなり、全國の新聞争て之が報道を傳へ、社説に論説に日として論ぜざるはなし、世人の宗教問題に對する態度、社會的視線の燃點益々切實なるを見る、雨降りて地固まり、熟果地に墜ちて核初めて破る、吾人は鳥の雌雄を論するを止めて佛壇の下、聖典を繙きて、肅むて佛説の甚た苦ろなるを感激し、重誨歎々として千古を洞察し賜へるに涕泣せずむばあらず。

獨り同派新法臺は是より先き事務の委託を辭し、大法主の許を得て徐ろに修養を事とし、暑中寧日なく内外の經典、東西の歴史、宗祖の鶴業、偉人の傳記、書籍に研鑽せられ特に

屢々侍者を遣はして大法主の病氣を見舞はしめられ、孝心切々傷心止むへからざるものありといふ、吾人は同派將來清明の天地の開かる可きを確信するもの也、苟も真摯なる宗教信者は社會か與ふる苦言激語の下に此際先づ自己の身上を戒飾して可也。

宗教法案に關する風説

宗教法案に關する風説紛々たり、政府は此十七議會に提出するの意ありと云ひ、各宗自ら進むて提出すべしと傳ふ、是一時の風説に過ぎずと雖、聊か吾人の所見を披きて同憂諸士の参考に供せんと欲す。

宗教法案に關する吾人の意見は今更事新らしく叙述するの要を見ず、唯一言すべきは吾人歐米に於ける實際上の調査と學理との研究は從來の主義に於て非常なる確信を加へ來りたることなり、而して吾人今後猶公平實着に此等の研鑽には怠らざるを期するものなり、政府も亦常に調査を繼續せりと傳ふることなるが虛心恒懷根本的に調查せられむことを切望せざるを得ず、殊に其提出の方法の如き最も公明なる態度に出でられむことを欲す、曩日同案の貴族院に顯はれたる時の如しも時既に遅く、相戰ふの止むを得ざるに終れり、聽て吾人は各宗會議及び各宗當局者に一言せむと欲す、曩日各宗より政府に向て法案提出を運動せしとき、吾人は切に之を急ぐの

胞中工女を虐待する鬼の如き悪魔の如き冷血漢を見るの耻を得たり、而して之を救濟する佛の如き菩薩の如き仁慈的婦人を見るの榮を得べからざるか。

佛教儀典と音樂

西洋に於ては宗教の儀典と音樂とは互に相伴ひて發達せしものにして、普通の音樂はもと中世已來教會儀典の音樂よりも轉化發達し來り。又十九世紀に於ける音樂の進歩は教會の儀典をして神聖に且趣味多からしむ然るに我國佛教の儀式にして時勢に適應するもの發見せられざる所以のものは、抑々佛教音樂の發達せざる其の第一原因たらざるなし。洋々の音、恍惚として樂士に遊ぶの想あらしめ、哀々の響、悽愴として幕下に眠るの感あらしむ、吾人は乾燥無味の長談義よりも寧ろ神來の一曲吾人の心靈に感化を與ふるの大なるを感じするもの也、世人泰西の教會を嘲りて曰く之に集るものゝ過半は音樂の爲めなりと或は然らむ、然れども嘲の言は一面に於ては教會か如何に趣味多くして知らす識らずの間に人を宗教圈内に引入するの勢力あるかを示すもの、佛教者が機械的の讀經に人をして徒らに倦怠の情を催さしむるのみにして神聖の念を生ぜしめず、最も悲哀なる葬式の儀式却て悽愴の感を歎くが如くなるものあるに教若ぞや。吾人は輕率に摸倣を事とするを贊せずと雖、信念を發洩し、眞情を露はす方法に於て、生ける儀典、新しき形式の生ぜむことを欲するもの也。

士官も雖一分間に何程歩むかを檢して、此比例で世界を一周すには何年を要するかを算へたといふ話なきいた事が、無罪氣で共に興味のある話である。

◎佛國教會問題 本誌前號に於て佛國の宗教學校一時に閉止せられた事を報道せしゝ、今更に詳細なる報道に接したるを以て多少重複に涉る恐れなきに非ざるも左に之を摘要して讀者諸君の参考に資せんと思ふ、以て宗教勢力の多大なるかを知るに足る△示威運動、七月中旬より巴里を始め各地盛に示威運動起り、されば爲め血を流すこゝもあり、幾多の人民は拘引せられ、紛々擾々一方ならざる狀態である、ローマ法王は近き内佛國政府に抗議するゝ、或は教書を發して政府の無道を攻撃するとの噂もありてもして教書を發すると同時に四里及全國人民の大集會を企てる事である。

△總理大臣の演説、總理大臣コンベイは巴里農業協會の宴席に於て一席の演説をなして曰く、子は結社法を實行せんが爲めに總理大臣となつたのである、此結社法は教師組合の非常に増加した爲め出來上つたので、此教師組合は政治及選舉に關係して立法府に影響を及ぼすからである、共和政府として此法律なき時は君主的若くは教國的の制度になつて仕まゝら、政府は凡ての侮辱と脅迫とにしばらす断然實行する覺悟であることを述べたろうだ、之が爲めに益々激昂して各地の教監は激文を唱して人民を煽動すると甚しく、就中、巴里的大教監は大統領のルーベーに書を送りて見ての佛國民の爲めに完全なる自由を要求し、政府が教師組合の推持してある學校に閉止を命ずるは、人民の親族權に對する不正の手段であるといふことに注意して貰ひたいと書いて送つた、宗教黨の機關新聞の如きはコンベイは猛烈である無理である云ふて盛に攻撃して居る。

△調査、七月一日の調査による、巴里市中で二十七萬八千六人の生徒ありて其中で公立のものは十八萬六千二百四十人、普通的私立學校は二萬八千七百九十一人、教師組合の學校の生徒は六萬二千九百七十五人其中の七千人は閉鎖せられた學校の生徒數である、巴里附近に於て教師組合の生徒は二萬六千其中の三千人は閉鎖せられた學校の數で巴里井に附近にても彼此一萬人の生徒は路傍に迷ふてゐる、然るに公立の學校は全く滿員であるがら、宗教外の學校に收容することが事實上出來ぬ、これが反對黨から攻撃される武器となるである。

△柏林毎日新聞の七月廿七日の巴里通信に總理大臣は各府縣知事に對して私立學

◎教世軍の分裂 瑞西に於ける教世軍の最高司令長官は彼有名なる大將ブースの娘及び其女婿にして、此夫妻二人は此頃其父より分離して獨立に布教するこゝになつた、ソレハド・トルドー・ヴィンの謂道する觀に賛同したからであるド・ヴィンの說は即ち一切の病氣は精神によりて平癒するものである、耶穌は不遠此世の中に實現するものである、人民は凡て兵役を拒むの義務あるものである等は其重なる所說なりとの事で、教世軍の大將たるブースは非常に立腹して遂に其娘及女婿より職務をとり上げて放逐したとの事である、然るにド・ヴィンは預言して曰く若しも教世軍は吾々に反抗するならば支離滅裂の状態に陥るであろうといふた、此預言は不思議にも適中して遂に瑞西の教世軍はさうして分裂しかけたとの事である。

◎英國の小學校と各宗派 バルフオール氏は小學の規則を改正して、各宗派にも學校を建ることを許して其學校に於て子供を其派の教義に從事教育することを認めやうとしてゐる、併し國立學校と同様に輔助を與ふることにして多くの地方は英吉利教會に屬する學校より外を以て、其外の教派は信徒渺なきを以て獨立に費用を抛ちて學校を起す能力がない、去りさて教派の異なる英吉利教會の學校に入學するのも面白からずとて、政府に抗議して居るさうである、けれども政府にても地方少數人民の爲めに第二の學校を起す必要もなしうて自下行惱みの姿であるとの事である。

◎時間表の教授

プロイセンのシェレージエン州のある小學校の校長が、兒童の漁車漁船等の發着表を取調ぶるこゝの暇取るか見て、時間表を教授しやうと思ふて、鐵道局へ古き時間表を請求して遂に其目的達せられたとの事である、我國の小學校亦でも交通頻繁の土地に限り確かに此必要があらうと思はれるから實行したならば有益であらうと思ふ。

◎一本の鉛筆と其字數 ある間人がありて一本の鉛筆をさりて之を削り盡すまで幾字を書き得るかとて、之れを試みしに初めの人は九萬五千六百八十言を書き、次の人は四十萬言を書いた、そして鉛筆の尖を削るゝご五十九回である。日前に成り立てる私立學校も専認可を受へべきや否疑問である、然るにコンペーは受けてしま主張してゐる、參事院も之と同様の議決をしたが、其差僅に二票の多數であつたアルデックルーソーは前年結社法を講する際に(三月十八日)既に成立したるは新に認可を受くるに及ばぬと發表した、而れども彼は意見を變更して本文に關係ある結社法第十三條第一項に宗教上の教師組合は法律による認可なくして之を設立するを得ざりて第二項に教師組合は參事院の許可を受くるにめらざれば新に支部を設くるを得ざりてある、此條文は色々に解釋が出来るから、政府の法律の基礎は確乎として居らね、故に政府反対者が攻撃する所以である。實際上の問題は政府は其目的を達するに十分の力を有するや否やうして政府は豫め其處分によりて起りて来る困難を豫め期し居るや否や、これ實に一の疑問である、政府の行動は全く理解することが出来ぬ、全体幾萬といふ兒童を就學せしめずして如何に處置する考なるか、佛ランスに於ける教育は義務的にして且つ無月謝なり、從て國家は法律上就學の義務ある兒童を教育する義務もある、而るに私立の學校を閉止して如何なる處置を施す積りなるか、兒童の兩親は國家に對して就學せしむる権利を有するものである、何せなれば兩親が兒童に教育を受けさせねば國家より罰せらるゝからである、殊に私立學校斗りの地方では全く無教育の有様に陥るて仕まゝ、そこで政府法律上で打勝た所で實際上から云へは政府は到底反対黨の攻撃を防ぐことは出來ぬといふことを通信してある。

◎修道院

巴里のセシュイット、カビタン等の修道院にては、泣いて懺悔するものあり、火の如くなりて新婚するものあり、其熱心の状態殆ど狂的に近い。併し走れるが爲めに今回の如き開明戰争の起るのも無理ならぬ事であると思はる。

監獄未來の夢物語

筑涯 閑人

第四回 (料理屋營業)

泥長君は其卓上に備へてある呼鉛を鳴らした、招きに應じて間もなく入り來つた男がある、此男は雜役夫と云ふ名義で監内の給仕兼小使を勤めて居る十六七の小僧、無論囚人である泥長君は此小僧に下の料理屋へ行つて直ぐに二人前の料理を用意するやうにと命令を下し且つ余に向つてモ一時分時ゆゑ下で一寸粗飯を差上げないと云ふとであつた、折角のお馳走何も遠慮するには及ばぬと殊に監獄内の料理屋とあつて見れば是非其模様も實驗して見たいので早速泥長君の述について所謂料理屋に行つて其食卓に着いたのである、食堂は廣く、走り立派に裝飾せられて、あつて富士見軒などの遠く及ぶ所でない、給仕の持つて來た献立表を見ると先づ第一が若芽汁……ソップに若芽のはいつて居るので一名を監獄汁又は鏡汁とも稱し歴史上からオノの儀式まで付けるもので至れ粗末の汁である、ソレから鮭のフライ、ビフステッキ、ロースチキンなどお馳走の品々澤山のもので料理加減なども帝

回でも二十回ても苟くも工錢のあらん限り、また所持金の計るす限り、且つ親元へても仲間の者へでも無心して送金の出来る限り、何遍ても滋養物と號して牛肉、魚肉、雞卵、牛乳、菓物、餅菓子、燒芋の類を購求することが出來た位のことであつたが、それがすべて外から買ひ入るもので、價は高し物は悪るし、ね負けて養たものなどは囚徒の口に入る頃にはまるで冷え切つて味も何も無くなつて仕舞ふやうな譯で、折角の恩典も甚だ難有味を薄くすることになる、其れが爲め往々私設料理店と云ふも可笑しいが狡猾な連中は工場の一隅或は戸棚の中などへ炊烹所を仕つらへて窓かに料理を爲たり鮪を作つたり團子を掠へたりなどするやうな弊も起きて、甚しきは戸棚の中で料理番を爲て居つた奴が何時の間にか炭酸瓦斯の中毒で其儘、窒息死に至つて居つたこともあつたと云ふ咄である、其んな次第で食物購求法は甚だ不完全であつた故、時の當局者の考へから彼の兵營内に行はれて居る酒舗の仕組を監獄内に採用することになつた、これも始めは人民の受負であつたがソレが官設となり三變して囚徒の受負となり更に進化して以て終に今日の料理屋組織となるに至つた次第である、料理屋の營業も營業とは云ふものゝ一種の役業であつて相當の技能あり資力ある者を典獄が撰んで之を指定するのであるが當業者は固とより少からぬ營業税を上納するの義務を持つ、此營業税は監獄收入の重なる部分をなすとのことで

ある
今日の監獄作業と云ふものは吾々の考へて居つた所とは全く其趣を異にして居るので今では監獄が強制して或る作業を取らしむるやうなことは全然廢止せられたので、すべて囚徒の自由に任かせるの方針を執る、故に工錢給與などの面倒もないので仕事をして得る所の利益は普通營業の状態と同じやうに悉く其れが囚人の收入となる譯である、其代はり中には損耗が續いて終に閉店したり破産したりするものも少からぬと云ふことである、大体監獄又は囚徒同士の需用に應するのが監獄作業の目的で此方針を實行して以來と云ふものは自由競争の苦情などは全く其迹を絶つに至つたので、實業社會別として姉子男爵の會長となつて居る工業協會の如きは恐懼斜めならず時の當局者に對して大々的感謝状を捧呈したとの風説である、尤も我國では亞米利加のやうに民間の收撃に餘義なくせられて監獄作業の規模を縮少變更したる譯ではなくて一つは囚徒の同盟罷工又一つには恰かも同時に起つた受負者の同盟罷業規律廻行の方針から囚徒の工場別異法を嚴重にした結果であるそれが抑のも原因であつたと云ふことだ、其れで從前用ひた所の工場は今日では、すべて各俱樂の集會所に利用せられて居る

作業の種類としては今日でも尙ほ靴工裁縫工機織工指物工等色々のものがあることはある、併し前にも言つた通り其大

部分は即ち囚徒の需用に應ずる仕組みなのであつて重もに新参者や初入者や其他餘まり働らざのない謂はゞ上等社會に屬する者の仕事に極つて居るやうな姿である、花造り、鳥飼ひ業などになるとズット高尚の職業に屬するものであつて一たび其監房に入れれば自然と優美な詩的感情を起さるを得ぬ、花と小鳥情に渴した囚徒の爲めには無上の感化力を與ふるものなりとの説は昔し既にクローネ翁に由つて主張せられた所であるが流石に今日作業として盛んに之を培養し飼育せしめて以て大に囚徒の需用に供せしむると云ふことは文明的行刑の旨義に叶ふものと稱賛すべきである。

閉 文 字

僕はイツモ達磨をきめこんで一切外出せぬにこしにしてゐるが、それがあらぬか近頃は胃病にかかり加ふるに神經衰弱に罹はれ萬事弛緩の姿で、たゞ毎日散歩して氣晴らしなしてゐる斗りだ、ツヒ此間も一友ミ上野公園まで散歩に出掛け、山王臺に建つて居る老西郷の銅像の邊に杖を留めた、夕暮の空模様を眺めつゝ友は老西郷に就て色々の事を物語せられた、古い話であるけれども閑文字の材料としては適に耳を傾くる程の價値があると思はれる、それはこうである。

一二年前に亡くなつた陸軍少將の大沼涉といふ人は母校中でも優才の名が高く殊に嚴格な人であった、惜しい事には眼を病んで數年前より豫備となつて現役を退いて居た、尤も亡くなる前に男爵を授けられた所を見ても有爲の人材であつた事がわかつ、まして藩閥に縁故のない下野の黒羽藩士であるから尙更の事である。

維新後ド一云ふ關係があつたが、いたく老西郷に愛せられ常にその幕下に加はり、彼の征韓の謀合はすして明治六年に老西郷が野に下つた時も、共に官を辭して鹿児島へ參つて行はれた程であるから、其關係の密であつた事が察せられる、

(劍虹)

講 究

加特力教師の妻帶禁止

池山 繩吉

加特力教會の教師は其教師たる資格に附隨する諸種の權利を享有すると同時に、ある幾多の義務を負担する、妻帶禁止は即ち其の義務の一である。

妻帶禁止の制が教會組織の活力の上に及ぼす影響は非常なもので、例へば総令車が完全に出来て居ても、之に潤ぐ油がなければ十分に廻轉しない如く加特力教會の組織は妻帶禁止の制あるに依て、益々其運用の妙を極むる事が出來るので、夫の加特力教會が國家、社會及び新教其他の宗教團體に對して偉大的勢力を占め、且つ一種特有の凄味を有する所以は、其の原因固より一にして足らずとはいへ、其の教師が所謂浮世の係累なき獨身者なるとは、慥に其の主なるものゝ一で、證じ來れば、妻帶禁止の制に負ふ所多しといふも過言でないのである。

(七一)

其後大沼は島津公爵の邸に居つたが公爵が東京へ移らることとなつてから住所がなくなり、其時老西郷は大沼に粗末な別荘を造つたから長く留まつて居る。宜かろうと云つたが、ド一云ふものが急に駆りたくなつたから坂東するこにしたが、老西郷も深くは止めず、貴公が飯つて官途に就いたら中佐位にはして呉れるだろうと云つたが、果して官途に就いて少佐となつた。

程なく十年の役が起つた、大沼の身に取つては先きに坂東の心の起つたのが順逆の分るゝ境で、若し其時鹿児島に止まるにしたら無論一方の將となりて官軍と戦ふことになつたに違ひない、然るに今は官軍となり山縣中將の部下に屬して鹿児島兵と戦を交ることになつた、追々老西郷の勢ひ盛まつて城山に進くや官軍之を稻原竹砲の如く開んだり日山縣は部下の將校を集め敵は定めて一方の血路を開いて逃ぐるでゐると思ふが、諸君は如何に考へるが各自の意見を微した、時に大沼の云ふには老西郷の兵法は拙者が一番能く知つて居る、決して血路を見出しても逃げる様なことはしない、敵は必ず隊を分つて我軍の中堅を見掛けてやつて来るに違ひない、隊の中には屹度老西郷が居るであらふと云つた、然らば君は之を防ぐかと山縣が云ふから死を以て戦ふべしと大沼は引受けた、果して其旨の通り中堅指してやつて來た、大沼はさうして力戦して之を防いた、

隨後大沼は老西郷が平素愛して居た連銃を得たが、生前深く眷顧を受けた老西郷の遺愛の品であるを思ふと如何にも胸中張り裂くの思ひをして今昔の感に堪へぬならイツソこれは弟の從道氏に贈るうと思ふて野津道貫より從道に話を聞いて貰ふた、所が、眷顧を受けた君でさへ忍び難いと云ふに、まして兄弟の身では更に忍び難いから矢張其儘持つて居るがよからうとのことでツヒ大沼は自身の許に置くことにした。

それから大沼が廣島に職を奉して居た時、前田某と云ふ洋画家が長く其家に止

まつて居たが、一つ僕の爲に歎を書て弔はれて、それは外ではない老西郷の肖像

へねからイツソこれは弟の從道氏に贈るうと思ふて野津道貫より從道に話を聞いて

貰ふた、所が、眷顧を受けた君でさへ忍び難いと云ふに、まして兄弟の身では更に忍び難いから矢張其儘持つて居るがよからうとのことでツヒ大沼は自身の許に置くことにした。

それから大沼が廣島に職を奉して居た時、前田某と云ふ洋画家が長く其家に止

時報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

報

時

政

教

時

る禮拜に参するを拒みたる者は、之を教會外に排斥すべき旨を決議して、却て結婚せる教師を保護したが、开もこの規定たるや、他面より見れば當時教師の結婚が如何に益々蔑視される様になつたかを反證するもので、第五世紀の頃には、慣習上高等の教師殊に教監は其位に即いてからは、其以前正當に結婚したる婦とも、最早一所に暮さないといふとが例となつた。而してエスチニアノ皇帝は是等の慣習を參照して、教師の婚姻に關し次の原則を規定した。

一、妻子なき教師にあらざれば教監に任せざると
二、下級の教師(小教位)は婚姻するを妨げざるもの、上級(大教位)の教師(教監、上教師、執事、執事補)は其位を取得したる後には結婚し得ること(若しこの禁に反して結婚したるときは其の婚姻は無効にして、且つ其の教師は免職せらるゝこと)

三、大教位となる前既に結婚したる者は上級教師に任せらるゝを妨げざること、又其位を取得したる後に於て婦との同居を忌避するに及ばざることトルラーン大會(六百九十二年)は大体之と同様のとを議定し、たゞ結婚せる教師と雖も其の婦と別居するに於ては教監に任せられ得るものとした。希臘加特力教會には、今日迄も此規定が行はれて居るので、今日の實際では、高等教師の候補は、概ね高等教師となりざる前に於て結婚する例になつて居つて、彼等は

其位を得た後も依然其の婚姻を繼續して差支ないのであるが、一旦其妻が死亡すれば再び結婚することは出來ないことを、なつて居る。而して教監は通例無妻のオルデン教師を以て之に充つるととなつて居る。

二、西方教會 即羅馬加特力教會の方では、東京教會に比して遙に厳格なる方針を探つて進んだ、西方教會の内で一番早く妻帶禁を定めたのは、三百六年西班牙なるエルヴィラ

ロリンガーの朝を経て、フランチノ帝國が滅ぼして天下の如く亂れ、一般の風俗頗廢を極めたるに際し、テオドーラ、マロチアセルギウス三世、ヨハン十一世、十二世等の諸教主の放擣、亂行は、上の好む所下之より甚しき有様を馴致して、第九世紀第十世紀の前半に至り教師の腐敗は殆んど其極に達し、妻帶の禁は全く忘れられたるものゝ如く、下級の教師は言ふに及ばず、上級の教師、教監では、公然妻妾を蓄へて憚らない様になつて、第十一世の前半頃迄は、教師の婚姻は一般的の常習として毫も怪まれない姿で、剩へ所謂ニコライ黨なる(默示錄第二章六に因みて名付けたるもの)公然教師の妻帶を辯護する一派が現はれ、ベネデクト九世の如きは、身教主の地位にありながら、其姪と結婚せんとするに至つた。

然るに物極まれば必變する習で、第十一世紀の中頃より、一方には一派のオルデン教師が中心となつて、妻帶教師の排斥を目的とする團體が出来ると同時に、他方には、レオ九世(一〇四八一一〇五四)ヴィクトール二世(一〇五五一〇五七)ステファン十世(一〇五七一一〇五八)ニコラウス二世(一〇五九一一〇六一)アレキサンダー二世(一〇六一一〇七三)の諸教主は孰れも積弊の刷新に熱衷し中にも最後の二教主は、妻帶せる教師の執行する禮拜に信徒の參與するを嚴禁し、夫のガンクラ大會の議定と正反対の教令を發して、信

徒をして反對に教師の品行を監督せしむる様にした。繼で教主の位に昇つたヒルデブランド即グレゴール七世(千七十三年乃至千八十五年)は不屈不撓の精力を以て、主として、教師を親族、故郷、本國より隔離し、専ら教會に繫屬せしめんとの教會政策の視點より、極力禁止の勵行を企圖し、千七十四年、羅馬に大會を開いて、前掲二教主の教令と同様の趣旨を議定し、教書を發して普く四方の教監に知照し且つ其の實行を確保せん爲め、使節を派して各地に大會を招集せしめ、其會に於て更に又右羅馬大會の議定を繰返さしめた。一時は彼の遣方が餘りに烈しかつたので、一部教師の激烈なる反對が起つて、教會は殆んど未曾有の紛擾を極めたが、彼は秋霜烈日の意氣込を以て、其所信を貫かん爲めには、如何なる手段に訴ふるをも解せず、斷々乎として何處へ迄も押通した從來グレゴール第七世を以て妻帶禁止制の創定者とする説は往々耳にする所であるが、是は固より教會史を知らざるに坐する誤謬であるが、兎に角彼の力に由て、妻帶禁止といふことが、教會内に於て、牢乎として抜くべからざる法律的觀念となつたことは疑を容れないのである。

千百二十二年及び千百三十九年に於ける所謂ラテラン第一及び第二宗大會は妻帶禁止の法制發達の上に更に一步を進め、從來は、教師が結婚すれば、其教職を免し、場合に依ては宗門排斥に處するに止まり、其婚姻は法律上有効のものと

なつて居るのを、爾來、執事補以上即高等教師の婚姻は法律上
成立せざるものと看做すこととなつた。

(二二) なつて居るのを、爾來執事補以上即高等教師の婚姻は法律上成立せざるものと看做すこととなつた。斯の如くして妻帶禁止の法制は之に其の完成を告げ、發達の終點に達したが、扱其の實際の様子は如何であつたといふと、固より教師の行狀は一朝法律の規定に依て忽然として改まる筈はないので、先づ一口に言へば、教師が公然結婚し得ざる結果、從前教師の妻であつたものが、法律上妻の資格に下落したのに過ぎないを見て大過はないのである。實に中古に於ける教師の墮落は甚しいもので、今茲に一々其例證を擧げる餘地はないが、ザルツブルヒの大執事ハインリヒは『俗人の姦通、賣淫は懲悔の制により、教師の戒飭する所となるも、教師は何等の錮制を受くることなく、且つ彼等は皆同じ醜行を逞くして居るので、敢て他を告發する者がない』といひ、巴里の大教監ウイルヘルムは『教師は單に罪ある人といふのではない、犯罪者である』といひ、オックスホーフの神學博士ホルマットは『今日の教師は婦女を誘拐する天使となつた』といひ、アンゲルスの教監メールは維納の會議（千三百十二年）に於て、當時の教師の狀態を述べて、『品行の上から見ても、知識の上から見ても、丸切價値のない賤むべきの下等人間が、澤山神聖の教位を享けて教師となるもので、教師の身分全体の榮譽は、爲めに地を拂つて空しくなつてしまつて、教會の評判が悪くなる。而して俗界より見れば教會

現制

提議のりたるにも拘はらず、教師に結婚を許すときは、其の妻子眷屬の關係は教師をして教主の職紳より脱せしむるに至るへし」といふ意見が勝を占めて、遂々夫のラテラン宗大會の議定に基いて妻帶禁止といふことに一決した。

其後或は著述に、或は運動に、殊に第十八世紀の後半以後時々妻帶禁止の攻撃はあつたが、何れも該制の上に何等の變を惹起した程のものではなく、夫の佛國革命の際、政府が國法と妻帶禁止を認めないこととなつたとき、多數の教師が公然結婚したことはあるが、これも一時のこととて革命の終結すると共に其跡を絶つてしまつた。而して現今の實際は如何であるかといふと、南米共和國邊では隨分みだれて居るさうであるが歐洲では決して昔の様なことはなく、少くとも社會の表面に露はれて、社會の惡感を惹起する程の失態のないことは、新教側の觀察者と雖も亦之を認めて居るので、先づ今日は比較的最も清潔に行つて居るものと見て可いのである。

現 制

其効力を異にして居る。

大教位の教師は、事實上結婚しても、其婚姻は教會上不成立で、且つ其の教師は妻帶禁止に違背した罰として、當然宗門より攘斥され、其職務を免ぜられる。

小教位の教師の婚姻は有効であるが、矢張教職喪失の原因たることは一である。但し其の婚姻が初めてのであって、且つ其の婦が處女であるときは、教監は他に適當の者なき場合に於て、例外として彼に小教位の職務を執ることを許すこと出来る。

妻帶禁止の制は、直接神定の法則に基くものではなくて、
教會の立法に成りたるもの、即所謂神法 (*iustum divinum*) でも
なくて、人法、(*jus humanum*) であるといふところから、妻
帶禁止は場合に依て免除されることがある。但し其免除を爲
し得るものは獨り教主のみである。而して免除は獨り箇人に
對して與へらるゝのみならず、時としては或る時期に際し或
る地方全体に向つて發せられることがある（千五百五十四年
教主ユリウス三世は英國女王マリアが再び英國に加特力教を
興したとき、ヘンリー八世、エドワード六世の朝に於て結婚
したる教師に對して、それから。ビウス七世は佛國革命の際

結婚したる教師に對して、所謂一般の免除を與へた（前記のはしら頭まで）は、國家は該制に關する文書の規定（現て

摩訶迦葉 Mahakasyapa は佛弟子中の上足にして、孔子の顔回、基督のボーラーとも云ふべき人である、特に佛成道の當日に出家して、佛一代の說法を直接に聞き、且つ佛滅の後は僧團の上首となりて釋尊の衣鉢を傳へられた次第である、倩々此人の傳を見るに、其經歷、性質を初めとして宗教上の修養、平素の實行まで頗る健全なる経過をなしたる人にして、

佛弟子小傳

(四)

近角常觀

尊者摩訶迦葉

全く菩提會發員の今日迄の進歩を宜しからずとし、別に菩提會に依らざる管長會を開かんとするものにて、即ち菩提會を根本より改造せんとの意味を含みしにより多數の同意を得たる次第なりといふ

◎基督教界の人々にして今回の代議士選舉に當選したるもの

●高橋五郎 氏は此頃モルモン教とモルモン教徒と云ふ書を著せり

信

眾

島田三郎 石黒通一郎 片岡龍吉 根本正

伊藤俊介 津田銀雄

の六氏なりといふ

◎東本願寺 にては近日來紛擾を重ねつゝあることは、新聞紙上にて見る所なるが、所謂改革派なる者に對して僧籍除名の處分に行ひしもの差當り十六名ありといふ

教師の爲したる結婚と雖も、國法上必要の條件を具備すると伊、白、蘭等の諸國で、之に反するものは西班牙である。奥太利は二者何れの部類に屬するかは疑問になつて居る。それは同國民法第六十三條に「高等の教位を享受したる教師は有效なる婚姻契約を訂結することを得ず」とある規定を、或者は、教師は教會脱退後と雖も結婚することの出來ないものであると解釋し、或者は、脱退後ならば差支ないと云ふので、千八百七十七年は衆議院は有効説を決議したるに、貴族院は之を否認した而して最高裁判所の判決例は教師の婚姻は絕對に無効として居る。

以上は妻帶禁止の制を主として沿革的に述べたので、社會的、政策的立場より觀察すれば、更に又論すべきことがある點があるが、是は暫く後日に譲ることとして、筆を擱く

全般の妻帶禁止の認識を宣しからずとし、別に菩提會に依らざる管長會を開かんとするものにて、即ち菩提會を根本より改造せんとの意味を含みしにより多數の同意を得たる次第なりといふ

に當り特に讀者諸君に希望する所は、現時我が佛教界に於ける真宗以外の諸宗派の妻帶禁止の實相が加特力教會に於ける妻帶禁止の沿革に對照して見るときは、果して其の何れの時代に旁流たるものがあるかに付て、考一考せられんことである

(完)

教界彙報

◎紀念文庫

大谷派東京府下第一組の寺院中、有志の人々數名の發起にて、今即佛教主義の幼稚園を設立せんと、目下計畫中なるが、その場所は淺草本願寺地内の御花園を以て之に充つるならんとの事なり。

◎善友會

去月廿七日京都に於て各宗管長會を開き、覺王殿建設にて下布教師の選擇中なり。

◎覺王殿

去月廿七日京都に於て各宗管長會を開き、覺王殿建設にて協議會を開きしに、名古屋説を主張する曹洞宗管長代理日置默仙師外四師は、菩提會加盟外の各宗をも招き寄せ、菩提會合規の下に開く會議とせず、別に各宗の如くんば會長を無視したるものなるより、自ら決する處なるべからずさて大に反対せしも、結果大多數を以て右の先決問題を可決し、當日は加盟外なる西本願寺其色に交渉するため一日休會する事なし散會セリ、右の如き決議をなせしは

殊に其長所は少欲知足の點にして頭陀第一と稱せらる、頭陀とは清潔なる修行を爲して胸中の煩惱を拂ひ去り心靈の領域を開拓することである。

王舍城を去る遠からざる所に摩訶婆陀羅と名くる聚落ありて其中に一婆羅門村があつた、其村内に非常に富める婆羅門ありて其名を尸拘盧陀羯波と云ふた、彼の婦が花園の中に遊戯しつゝ畢鉢羅耶那と云ふた、樹下に生れたとの意味である、獨子であつて父母は非常に之を寵愛し、性質頗る聰明にして學藝に通達して居つた、八歳の時既に、婆羅門の戒を受け四韋陀に通じ、特に哲學、宗教の點に於て一種天稟の英才を抱て居た、幼年の時其性質堅直にして常に世間を厭ひ、慾の不淨なるを知りて之を捨つる心掛であつた、年長するに及び父母が彼の爲めに妻を迎へやうと思ふた、すると彼は父母に答へるには私は婦を娶るを樂まず、寧ろ清淨の行を修したいと云ふた、父母は大に畏れて云ふには繼子なれば、天に生るゝ事が出来ぬと、古來傳ふことなれば是非娶れと勧めた、彼は止むを得ず、然らば私は五慾の樂を受くるを欲せぬ故にかくの者を娶りたいと云ふた、そこで他の婆羅門が周旋の任に當りて四方に之を求めた、然る處毘耶城より遠からぬ迦羅毘耶村に迦毘耶と名くる婆羅門の家に跋陀羅迦牟梨耶と名くる女があつた、此女頗る殊勝の人にして一日感ずる所あり

て夫を持たずして清淨の行を修することに決心したが、却て彼の尼拘盧陀甥波の爲めに周旋する婆羅門に發見され、遂に雙方の父母が結婚を約束せんとするに至った。そこで畢鉢羅耶摩耶婆は果して彼女は是の如き德行と智識があるかを知らむため、自ら往て之を見むと欲し、父母の許を得て、自ら食を乞ひ、漸々迦葉村に往きた所が彼の國の習慣として沙門若くは婆羅門にして食を乞ふものあるときは女か手づから食を將て出て彼に與ふことになつてある、そこで跋陀羅の女か何事なく出て、食を將て摩那婆の手に與へた、畢鉢羅耶は食し畢り謝して彼女に問ふには、仁者善女よ嫁する處あるや否やと、彼女答へて曰ふ、仁者摩那婆よ、摩伽陀國の富める婆羅門の子畢鉢羅耶なるものあり、我か父母我を彼に與ふること、せり、畢鉢羅耶曰く我聞く、彼摩耶婆なるものは内五慾を行せず、清淨の行を修するものなりと、女應じて曰果して然るか、今我之を聞きて大いに喜ぶ、我亦既に五慾を行せず清淨の行を修せんことを願ふなりと、畢婆羅耶是語を聞き終りて彼女に問ふて曰く、汝善女よ汝嘗て畢婆羅耶摩耶婆を見たることありや否やと、彼女報して曰、善き摩那婆よ我未だ曾て見たることなしと、時に摩那婆重ねて語りて曰く、汝善女よ、即ち我は是れ彼の畢鉢羅耶摩那婆自身也と、二人相見て其志の相合するを喜び深く相約し、畢鉢羅耶歸りて父母に詣し、速かに彼女を迎へて、十有二年間清淨潔白の

心に稱ふことなし跋陀羅報へて曰く聖子よ、我等二人は共に家を捨て出家すべしと、畢鉢羅耶曰く然らば汝は且らく此に住せよ、我は師を求むべし、若し尋ね得たらば汝に告げ知らすべし、その時汝も出家すべしと、そこで家内中の下男下女を集めて錢財穀米を分ち與へ、畢鉢羅耶は僧伽梨一枚を身に纏ひ、鬚髮を剃り落した、此時世間に未だ一の阿羅漢もなかつた、恰も此日の晨朝、釋尊が明相を現じて成道せられた、畢鉢羅耶亦此日、夜既に過ぎて、日初め出づるの頃、飄然として家を出た、如何にも少欲知足の高潔なる性質が能く顯はれて居る、彼は、大迦葉種姓の内に生れたる故、世間一般遂に其名を以て呼ぶことになつた。

摩訶迦葉、聚落に食を乞ひ、次第に遊行して摩迦陀國に至り、那茶陀村に至りて初めて釋尊を拜し、清淨無二の想をなし、我今に於て必ず教師を得たりと爲し曰く、世尊願くは我が爲めに師と爲り玉へ、我は是れ世尊の聲聞弟子なりと、佛乃ち迦葉に告げて言はく迦葉よ、若し聲聞弟子ありて是の如く一心正念し訖りて是我師なりと言ふ、此の如き心にて尊重供養するも彼の教師、知らずして知れりと云ひ、見すして見ると云ふ、是虛妄なり、然るに大迦葉よ我今實を知りて知ると言ひ、實を見て見ると言ふ、汝我所説の如く奉行して達ふことを得る勿れ、復次に迦葉に汝若し是の如き行を學はむと欲せば梵行の人於て敬重慚愧の心を起すべし、復次に迦

葉に汝彼の時に於て常に正念を起して捨離することを斷つる勿れ、復次に迦葉よ汝彼時に於て、五陰の中に生滅の相を觀すべし、所謂、此は是れ色なり、此は是れ色生ず、此は是れ色滅す、此は是れ受なり、此は是れ想なり、此は是れ行なり、此は是れ識なり、此は是れ識生す、此は是れ識滅す、汝是處に於て是の如く學ぶべし」と時に摩訶迦葉既に世尊の教を受け七日を経て八日至り、教の如く智を生じた、世尊此の如く教へ已りて座より起たれた、迦葉侍して世尊を送つた、路を行く未だ久しからずして一の樹下に至り、迦葉已か身上の僧伽梨を取り、地に敷き、世尊の爲めに座を設けた、佛其志を納れて是座に坐し玉ひた、此時佛は佛か着せられたる纏布の糞掃衣を摩訶迦葉に授けられた。

摩訶迦葉出家の前婦、跋陀羅は善き師を得ざるを以て外道波離婆闍迦の所に往きて出家して道を學び、大に成功した、所で世尊が既に女人の出家を許して其教團即比丘尼衆を建立せられた、摩訶迦葉は昔日の約束を想ひ出して、彼の跋陀羅が何處に居るか、之を探りて恒河河岸に外道の行を修して居る事を知つた、そこで人を遣はして早速に之を招きた、忽にして祇陀林中に來りて佛の所に詣でた、佛は彼女を摩訶波闍波提橋曼彌に度せしめ玉ひた、跋陀羅は具足戒を授かり、阿羅漢果を得、完全なる解脱を得た、聲聞比丘尼識宿命中の第一と

家庭を形作りて其理想を實行した、事稍小説めた話なれど摩訶迦葉の如何に真摯にして嚴肅なる人格であつたかは歴々見るが如くである、現時の如き腐敗墮落の極に沈淪せる社會は、少しく此雪の如く清らかなる摩訶迦葉の實行に反省するがよい。畢鉢羅耶の父母が死して、自身で家業の經營に當らねばならぬ様になつた、そこで畢鉢羅耶は家以外の田作などのことを檢べ、跋陀羅は夫の命令の如く諸の使女を喚びて始めた、そこで使女が烏麻の油を將て日中に曉したる所、諸の虫が百千蠕動する様子を見て、私は無量の諸の罪を得るだろうと案じしめよ、我是諸の牛類に水を飲ましむべしと各仕事に着手した。跋陀羅は夫の命令の如く諸の使女を喚びて始めた、そこで使女が烏麻の油を將て日中に曉したる所、諸の虫が百千蠕動する様子を見て、私は無量の諸の罪を得るだろうと案じるものあれば、否我等に何の罪あらむ、此等の罪は皆跋陀羅に屬すべしと云ふものもあつた、跋陀羅は之をきく仕事を中止せしめ、室内に閉居して思惟し、心中樂まず、低頭默然として靜坐した、所で畢鉢羅耶も亦田地を調べ、又諸の人々が苦役して種々無量の惱を受け、殊に諸の牛類が困厄を受くる様子を見て同情の念に堪えず、低頭默然として憂ひて居つた、がくの如く二人相語りて全く同様の感を生し益々憂鬱に沈んだ、是れ如何にも濃かな宗教的情操の發現である、畢鉢羅耶嘆きて曰く、我等家居して清淨の行を修して居るも十分

なつた。此の如く摩訶迦葉は健全なる方法を以て道を修し佛の一生を知り盡くした、佛が拘尸城に於て入滅せられたるとき摩訶迦葉は五百人の弟子を連れて波婆城の地方を旅行して居つたが道にて此事を聞きて駆け付けた此時佛滅後七日目にして佛の遺骸を荼毘に行はむとせしが如何様にするも薪が燃へなんだ、そこで阿跋樓駄が阿難陀に告げて曰ふには未だ、摩訶迦葉が到着せないからであらふと話した、果して彼か到着して、其覆布を去り親しく之を禮拜し、棺の覆布を掛けるや否や能く燄が燃る上りたとの事である、彼は直ちに王舍城に五百の羅漢を召集し、佛滅の後三藏を集結したことは皆人の知る處である、特に注意すべきは摩訶迦葉死去の有様である、彼は自ら王舍城に往きて阿闍世王に將に自ら死せんとする事を告げに往きた、彼は王宮に來りて門番に曰く往きて王に言へ迦葉來りて門に待ち謁せんことを請ふと、門番曰く王は正さに眠れり、若し之を醒まさば我は死を免れずとて聽かず、迦葉曰く然らば彼の醒めたるとき彼に曰へ迦葉は逝けりと、かくて迦葉は雞足山の南嶺に上り、三峰の中央に草を布きて魁とし從容として大涅槃に入りた、阿闍世王之を聞き大に驚き阿難を伴ふて雞足山に上り、迦葉の入寂した場所に塔を立てゝ、之を追悼した、摩訶迦葉は最後に至るまで其精神と行動が強健にして千古人の心を動かすものがある。

社 會 小 觀

▲議長問題 段選舉も既に終了したるを以て、早くも議長候補者の問題はつくり起り、正副議長共薦來の儀据え置くべしとの意見を有するものもあり、或は松田正久氏を議長となし、副議長は寧ろ中立議員より推舉して花を持たせんとの意見多數なりなど、傳ふるものあれど未ださだかならずといふ。

▲清國留學生 清國留学生が同國公使の保證を得ざる爲め我が諸學校に入学すると能はざるにつきての紹介は報道したる通りなり、それにつき東亞同文會等にて種々方法研究の結果、左の規定を以て彼等の便宜を計る事となり

一、今後留学生が同國公使の保證を得ざる場合には清國會館幹事長の保證を得て入学すると

一、東亞同文會、東亞商業學校、弘文學院、成城學校等に入學せる留学生は該校の保證を以て他校へ轉じむると

▲鳥島の噴火 一草一本悉く枯死し人獸の隻影だも認むる能はずといふ、此不慮の天災によりて全島民百二十五人は生ながら土石下に埋没せられぬ、何事悲惨の事か。

▲板垣對加藤 沢時最も滑稽なるものは政界に於ける板垣對加藤の選舉問題也、吾は此の老練せる板垣翁に同情を寄せんとするものなり。

▲板垣老再起 の說あり、即ち加藤の就任に激したるを好機として、士佐の政友會一派は老を起ししめて政友會副總裁と爲し以て活動を試みんとすと傳ふ、これ真に風氣に過ぎざるべし吾は此老の爲めに風説ならむこそを祈る。

▲新聞電報料 新聞電報に限り特に其料金を輕減し、其取扱を簡易にするの案を定めて来る十七議會に提出するに至るべしといふ。

▲蓮羅皇太子 肾下には本月英國御歸途米國を經て本邦に立寄らせらる豫定なりし、當分歐洲に御滞在の事に決し本邦御來遊は御見合せの由、

▲工女虐待 埼玉縣大宮在丸ヶ峰の某機業場にて工女を虐待すること甚しく、水攻め、湯攻め若くは滅食爵、其他妙齡の婦人をして裸体となしめて耻辱へ逃走を恐れて晝夜を分らず門戸を深鎖し、嚴々として監獄に居らしむるか如し、叱咤の聲、鞭笞の響日さして起らざるゝなく、爲めに病に斃るゝ者、不具となる者頗る多しといふ、これ眞に人道問題也、法を説き道を弘むるもの豈教済の策を講じて可ならむや。

▲工女救濟會 吾人は茲に喜ぶべき報道に接せり、即ち埼玉縣大宮、浦和、川越地方の基督教徒、佛教徒及慈善家等は近日工女虐待の甚しきを見て默止するに忍びず表題の如き會を大宮町に起し去月廿七八日頃より同縣各地に教済演説會を開きしと云ふ、遂に其實効を奏せらむことを望む。